欧米における言語と性差研究の最近の動向

阿　部　圭　子

アメリカにおける言語と性差研究は女性解放運動と共に発達してきた。1970年代に特に活発化した言語と性差研究も約20年が経過し、その研究の目的、方法、分野において様々な変化を遂げてきている。本稿では、1992年4月にカリフォルニア大学バークレー校において開催されたバークレー言語学会の言語と性差特集の学会における研究発表と6月にオランダのナイメーゲン大学で開催された学会での研究発表を中心に言語と性差研究の最近の動向を探ってみたい。

I. Berkeley Women and Language Conference: Locating Power

この学会では、フェミニスト理論と言語を基にした調査を近づけことを目的に女性語研究を中心に発表が行われた。女性語を研究していくうえで重要なファクターであるpowerを談話の中で分析する時には、そのpowerを多角的にとらえる必要がある。つまり、linguistic powerを再定義し、言語使用の中のgender, race, class なども一緒に考えていかなければならないことが提案された。

1992年4月4～5日にわたって開催されたこの学会は、全体で8つのmain speechと1つ concluding speechを含む58の発表があり、7セクション、3会場に別れて進行した。出席者、発表者のほとんどはアメリカ出身であった。Opening remarkとしてR.Lakoffが女性の沈黙をとりあげ、またconcluding remarkではD.Spender が女性語をposeitive に考えていこうという発表を行った。

A. 日本語に関する研究

1. Lessn feminine speech among young Japanese females by Shigeko

Okamoto and Shie Sato （カリフォルニア州立大学フレスノ校）

女性の被験者を年齢によって3つのグループにわけ、会話における終助詞や男性的とみられる語彙などを数量分析した。結果として若い世代ほど男性的な語彙を使用する傾向にあることが明らかになった。

2．Gender-dependent pitch levels: A comparative study in Japanese and English by Yumiko Ohara （ハワイ大学）

日本人が英語を話すとき文化的な影響があるか、またその影響には男女差があるかを調査したものである。女性は英語を話すときよりも日本語を話すときの方がピッチが高くなる傾向があるが、男性はそのような傾向はみられなかった。この結果より、日本文化では女性は女性らしく話すことを期待されるので、ピッチが高くなる傾向にあるのではないかと考察される。この研究には、被験者となった留学生の英語能力の差がピッチに関係してくるのではないかという意見もある。

3．Linguistic privilegr: Stating facts and speaking powerfully in Japanese by Janet S.Smith （カリフォルニア州立大学デイヴィス校）

事実を述べるとき男女差があるかどうかを、主に丁寧語と終助詞に注目して調査した研究である。中流階級の主婦と、仕事をもっている男性を被験者に選び、「と思う、ようだ、らしい、かしら、…」と「はずだ、わけだ、ものだ、のだ、…」を使用する頻度により男女差をみようとしたものである。

彼女の研究では以下のような問題点が指摘されている。

- ごく少数の被験者による結果を数量化して論じている。
- 終助詞の使用と男女差を安直に結び付けているが、トピックや立場によるので、ある程度コンテクストをコントロールする必要がある。
- 被験者の男女がちぐはぐで比較の対象にならない。
- 古いデータを使用している。
- 日本女性に対するイメージだけで論じている点がある。
- 女性の話しかたに顕著な主語の省略を、女性特有のシンタックスとしてとらえ、明らかにgrammerとpragmaticsの問題を混同している。

以上あげたもの以外の研究について簡単に紹介する。

・言語　韓国語、ニカラグアのラナ語、チカーナス、クレオール、アフリカンアメリカ人の子供の言葉、クレタ語、ジャマイカ語など。

・被験者の職業　大学教授とその秘書、Police officer, 老人、ESL の学生、性転換者など。

・メディア　映画、落書き、Address term, Fantasy line、エロティック文学、十代の雑誌など。

・他研究などへの考察　Tannenの研究にたいして、アニタ・ヒルの問題にたいしてなど。

・調査方法　談話分析 (interruption, back-channel, turn-taking)が主。

B．その他の主な研究

1．Information management: Women's language strengths by Dale Spender

これまでは女性語の特徴はネガティブに見られていたが、今後はその良さを見ていこうという発表である。具体的には例えば、女性が上手にtopic changeを行ったりするというようなポジティブな役割を見ていこうと提案している。

2．Waat aer we laughing about? by Susan Ervin-Tripp

18歳から30歳までの女性を被験者に、自分の気持ちをどう表現するかを調査するため、会話のどこでどの程度笑うかを調べた研究である。結果は、白人女性のみのグループでの会話のときはsharing や自己弁護のためによく笑い、男女混合グループで女性ではsharing が減り攻撃的なユーモアが増えるのに対して男性では自己弁護的なユーモアが増えることが明らかになった。これは会話におけるpower やcontrol がcontext によって異なることを示唆している。

3．Gender displays in talk among family, friends, and neighbors by Deborah Schiffrin

夫、妻、隣人という３者間の会話にみられる多重の人間関係を調査したもの。“speaking for another”、“story-telling”、“argument”の３要素

をあげ、どれもがpowerとsolidalityをあらわすと論じている。

4．Mother's role in the everyday reconstruction of 'Father knows best' by Elinor Ochs

中流階級の2家族の夕食時の会話をビデオに撮り、会話のパターンを内容、発話者、話の始まり方の数量化から分析したもの。妻が夫をたてるような話し方が多く、話題は子供について妻が夫に相談する場合が多かった。この研究により、家庭における夫・妻それぞれの役割から男女差が明らかになった。

5．Police officerと事故をおこした人の間の会話では、質問のパターンやあいづちの打ち方に、Police officerがある程度の権限をもちながら話していることが研究された。

6．女性の大学教授と女性の秘書は2つの異なるhierarchy に属しているので、goalが異なることを調査したもの。そこに働いている2つのルールは、rules for subordination とrules for upward mobility である。

7．女性の大学教授が新学期の初めにシラバスを発表するときに、男性の大学教授よりも自分を出さず、責任の所在を明らかにしない傾向があることを研究したもの。

Ⅱ．オランダでの学会

オランダで1992年6月9日〜11日にかけて開催されたこの学会は、社会学と言語学を結び付けることをその目的としたもので、ヨーロッパ出身の研究者を中心に、言語学、心理学、社会学、文化人類学などさまざまなバックグラウンドをもつ参加者で構成された。

研究発表の傾向としては、単語レベルや音の問題で多言語使用の分析をしたものが多かった。興味深いものとしては、ウクライナでは、女性が男性とかわらず主導権をもって会話を進めていくことを研究したものや、Eckertのいうcooperative strategyでステイタスを得ようとする“girl talk ”にたいして、“boy talk”を分析し、男子は悪い言葉を使うことで絆を深め、ステイタスを保っていくと論じたものがある。　　（共立女子大学）